

動物愛護も曲がり角？

捨て犬に手を焼く英国

大好きな英国が大に手をやいている。二年前に登録制度を廃止したあと捨て犬が増え、飼い主のモラルも低下したのか、町の中はフンだらけ。犬にかまれる事故も増えた。七人に一匹の割合で犬を飼い、親密な付き合いを自負してきた社会が、曲がり角にいます。

英国の犬は約八百万匹。さらに毎年約五十万匹ずつ増えているという。年間二十五万人が大にかまれ、車でひく事故もあわせると年間被害額は約百七十五億円とか。

クリスマスに子犬を贈るのが盛んだが、翌春にはどつと捨てられる。大きくなって、可愛くなくなるからだ。

そして、フン。散歩中にフンの始末をしている飼い主にはまずお目にかかれぬ。

二年前に犬の登録制度がなくなつてから、よりひどくなつたという人が多い。登録制度は一八八五年から続いていたが、登録料が三十七・五ポンド(約九十五円)と低く、持ち出しに政府が嫌気をさして廃止、飼い主のモラルに頼ろうとした。

動物愛護団体などはより強い

登録制度の復活を政府に迫り、最近、自主登録をスタートさせた。登録料二十五ポンド(約六千三百五十円)、年間費用十ポンド、管理費用を納めず額を払い、登録の際、番号を記憶させた磁気チップを簡単な手術で首に埋め込むというもの。犬の管理と

飼い主の自覚を狙っているが、反応は今一つ。「登録しなくても見られるテレビの受信登録がうまくいかなかったのと同じ」の声が聞かれる。

ロンドン市内・パタシーという場所には「犬の家」という、迷犬、捨て犬の「リサイクル」施設がある。市内で捕まった犬がすべて集められる。

毎週約四百匹が収容され、約一五％が運よく持ち主に再会して戻っていく。約六〇％が訪れる人に買われるので、「処理」数は少ない。この施設は一八六〇年以來、すべて寄付で運営されているという。大都市には同様の施設がある。

英国的モラルがまた衰えている、象徴でもある。が、ここでも捨て犬の増加に悩まされて施設の拡充が必要になり、どう猛犬の増加にも困っている。

一十七年もここで働いているF・ハムさんも「クリスマスの前ぐらいは、もう子犬を売らないようにしてもらわない」と、時代の変わりよさを嘆いている。

(ロンドン) 竹内(敬)特派員、写真も

かせのウイルスに糖たんばく有効

ネイチャー 三月一日号

鼻かせの原因になるライソウイルスの感染防止に、人が本来持つ糖たんばく質が有効だとする報告を、多国籍製薬会社「ベリンガー・インゲルハイム」など



捕獲された犬は治療や食事を与えられ、飼い主を待つ
ロンドンのパタシー犬の家で



「フンはお掃除」という公園のポスター
ロンドン市内で

